ISSN 2432-8782

佛教大学
総合研究所報

Research Institute of Bukkyo Univ.

2017.3 No.38

2 巻頭言
4 平成28年度 共同研究活動報告
10 平成27年度 共同研究公開報告会・シンポジウム要旨
14 平成28年度 共同研究公開シンポジウム要旨
16 共同研究ポスター展示の開催
17 佛教大学総合研究所紀要 第24号 目次
18 佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集 第3号~第5号 目次
21 彙報

佛教大学総合研究所

巻頭言

総合研究所の重点課題のいくつかについて

総合研究所　所長　野﨑　敏郎

総合研究所の担うべき諸課題については、昨年度の『所報』に示しており、これに継続して取り組んでいる。本年度は、とくに、評価ボードを点検・再検討し、これを改善すること、また本研究所の共同研究の今後の方向性を探ること、この二点に力を入れた。

評価ボードの改善

評価ボードは、それによって、当該共同研究の諸活動の改善を図り、研究成果の質的向上に資すること、またその共同研究の評価や教訓を、次の新たな共同研究に活かすことを目的としている。ところが、現実には、評価される側も評価する側も、関係資料整理や書類作成に追われ、それが往々にして大きな負担となっている。また、進捗評価結果を、当該共同研究にいかにフィードバックするのかについても、慎重な配慮が必要である。共同研究班に属しておられる方々に、研究に集中して存分に力を発揮していただきつつ、かつまた適切な自己評価を実現させていくのは、けっして容易なことではない。本研究所は、この点にかんして、引き続き評価ボード自体の改善を図っていくつもりである。

共同研究の方向性の検討

前年度から引き続き、本研究所の常設研究とプロジェクト研究の方向性を検討してきた。前者にかんしては、まだ具体的なテーマ設定を固めるに至っていないので、ここでは後者について述べておく。

本研究所のプロジェクト研究は、次の二種から成っている。

(1) 学際的、異分野複合的もしくは先端的な研究
(2) 学部、学科、研究科の単独または共同・連携により、学術研究の高度化、活性化および若手研究者の育成等を目指す研究

(1) ももちろん重要であり、これまでにも学際的な共同研究によって優れた研究成果が生みだされてきた。そしてそれとともに、いまわれわれがとくに重視すべきは、(2) の高度な学術研究と若手研究者の育成とを目指す研究であるように思われる。この方向の研究活動の強化について、私見になるが、その緊要性を指摘したい。

大学教育の現状と取り組むべき課題

どの大学にあっても、専任教員数を抑制しようとする配慮が働いており、本学も例外ではない。古い時代の教員は、自分の専門分野およびその周辺にのみ教育活動を限定することが（やろうと思えば）できないわけではなかったが、いまではそれは不可能である。教育現場では、ひとりの教員が、本来自分の専門でない領域にも手を伸ばして、さまざまな科目に対処せざるをえない。概説、理論、フィールドワーク、学説史、問題史といった多岐にわたる授業を、ひとりの教員が担当することが求められるようになっている。

この事態は、かならずしも現今の大学の否定的側面のみをしめしているのではなく、また筆者は、ここで「昔の大学はよかった」などと懐古しようとしているのでもない。むしろ、昔の大学の授業のなかには、首を傾げたくなるものがたしかにあった。筆者自身は、三〜四十年前に、二つの国立大学で学んだが、極端な例を挙げると、「史学概論」の講義のはずが、その講師が専門とする地域と時代の特殊なトピックしか語られず、史学研究のエッセンスにかかわる内容がなにひとつなく、そしてなんのまとめもなく突然終講したというケースがあった。別の授業は、毎回ただもう雑談に終始するだけのお粗末なものであった。受講していて、すくなからず失望させられたものである。

こうした牧歌的時代の国立大学と比較するまでもなく、本学は FD に力を入れており、新入生にたいする導入教育のありかたに集団的検討を加えるケースもみられ、また各科目の担当教員も、日々授業改善のための努力を続けている。しかし、とくに若手教員にとっては、その教育負担がかなり重いと推察される。また、「概説」「通史」「学説史」といった内容を担う授業を担当する力量は、相当な年数を重ねないと身につかないものである。そこで、本研究所のプロジェクト研究を、こうした教育任務と不可分に係わる領域に振り向け、集団的な取り組みとし、その研究成果を多くの教員が共有することが有効ではないかと思われる。

プロジェクト研究の新たな方向性

プロジェクト研究のこうした新たな方向性について、具体的に例示すると、若手教員を中心としてプロジェクトを組み、次のような課題に取り組むことが考えられる。

最近の研究動向のトレース
論争問題にかかわる論点整理
ひとつの研究領域の体系化と教材化
基礎的なデータベースの作成

要点は、個々の教員では手に負えないような広範囲にわたる取り組みを集団的に遂行することと、その成果を教育現場に反映させることである。共同研究の成果を、さまざまな授業の豊富化に役立てることができるならば、研究と教育との相互浸透が期待できよう。

こうしたコンセプトをもって本研究所のプロジェクト研究を推進することは、本学における研究・教育両面の発展に資するであろう。とりわけ、従来、ともすれば個々人の努力に委ねられてきた授業の質的向上に組織的に取り組むことは、若手教員の力量の向上とともに、教員全体の士気の向上につながるのではなかろうか。本研究所の重要な任務のひとつは、そうした活動にたいする支援にあると思う。

平成28年度　共同研究活動報告

■プロジェクト研究
「現代社会における宗教の力」(3年目)

研究代表　**榎本　福寿**

研究組織

〈研究員〉

榎本　福寿　文学部教授
斎藤　英喜　歴史学部教授
村岡　　潔　社会福祉学部教授
八木　　透　歴史学部教授
大谷　栄一　社会学部教授

〈嘱託研究員〉

大西　次郎　大阪市立大学大学院生活科学研究科教授
野田　隆生　華頂短期大学准教授
福永　憲子　大阪府立大学大学院博士後期課程
村田　典生　佛教大学研究員
吉水　岳彦　浄土宗総合研究所研究員
碧海　寿広　龍谷大学アジア仏教文化研究センター研究員
佐藤　壮広　大正大学非常勤講師
土居　　浩　ものつくり大学技能工芸学部教授
秦　　和也　京都教育大学心理教育相談室研究員
東海林良昌　浄土宗総合研究所研究員
永岡　　崇　日本学術振興会特別研究員
中嶋奈津子　本学非常勤講師
井上　隆弘　民俗芸能学会会員
権　　東祐　日本学術振興会外国員特別研究員

研究進捗状況

本共同研究は、3年計画の最終年を迎え、過去の実績、成果を踏まえ、また中間評価での厳しい指摘に留意し、仕上げの年と位置付けたうえで研究員の総力を結集する研究の展開を図った。当初の5領域体制を維持しながら、今年度は「現代における宗教の力」に即して特に「死に向き合う宗教文化」に的を絞りこみ、各領域の研究を相互に関連・深化させることに重点を置いた。

平成28年度の第1回目の研究会（第8回）では下記の各報告がなされ、取り分け民俗事象としての死者儀礼について活発な議論がなされた。第2回目の研究会（第9回）は、医療従事者や宗教者が向き合う死をめぐる諸課題について、死の現場に焦点を当てた成果報告、また死に関連して宗教の本質を問いかける講演があり、白熱した議論が続いた。第3回目の研究会は、3年間の共同研究の総括として公開シンポジウムを開催した。共同研究の締め括りに相応しく誠に盛会であったが、その詳細は次年度の本誌に掲載する予定である。

研究会等の開催状況

第8回研究会開催報告

日　時：5月21日（土）
〈テーマ「死者儀礼をめぐる民俗」〉
問題提起　榎本　福寿「浄土神楽批判」
研究発表　村田　典生「死と向き合う民間信仰ー流行神とぽっくり信仰」
研究発表　斎藤　英喜「“死霊鎮魂の神楽”再考」
研究発表　八木　透「伊豆諸島における死者祭祀の構造」
研究発表　宮澤　早紀（佛教大学大学院修士課程）「南部伊豆諸島におけるミコの口寄せー八丈島・青ヶ島を事例として」

第8回研究会

第9回研究会

第9回研究会開催報告

日　時：10月15日（土）
〈プログラム〉
趣旨説明　村岡　　潔
報告1　福永　憲子（大阪府立大学大学院博士後期課程）「病院死をめぐる死生のケア研究の再検討ー仏教的ケアはいかにして行われるのかー」
報告2　大西　次郎（大阪市立大学大学院生活科学研究科　総合福祉・心理臨床科学講座・教授）「現代における死の条理性と、不条理死への宗教的ケア　ー生者と死者をつなぐものー」
招待講演　安藤　泰至（鳥取大学医学部保健学科・准教授）「宗教は「死から甦らせる力」をもてるのか？ー「看取り」や「死の受容」を語る手前でー」
総合討論

シンポジウム「死者儀礼の現代的地平へ」開催報告

〈プログラム〉
日　時：1月29日（日）
趣旨説明　斎藤　英喜（佛教大学）
報告1　安藤　礼二（多摩美術大学）「出口王仁三郎と折口信夫の鎮魂」
報告2　池上　良正（駒澤大学）「死者供養文化の潜在力」
報告3　鈴木　岩弓（東北大学）「東北の被災地から超高齢多死社会へー死に向き合う臨床宗教師ー」
コメント　大谷　栄一（佛教大学）
総合討論
司会　斎藤　英喜

公開シンポジウム

■プロジェクト研究

「いじめの実態と児童・生徒への支援のあり方に関する総合的研究」(3年目)

研究代表　高見　仁志

研究組織

〈研究員〉

高見　仁志　教育学部教授
原　　清治　教育学部教授
小林　　隆　教育学部准教授
山口　孝治　教育学部准教授
渡邊　照美　教育学部准教授
平田　豊誠　教育学部准教授
牧　　剛史　教育学部准教授
石原　　宏　教育学部准教授
青砥　弘幸　教育学部講師
長瀬　正子　社会福祉学部講師
杉岡　義次　教職支援センター実習指導講師
三上　英夫　教職支援センター実習指導講師

〈嘱託研究員〉

菅原　伸康　関西学院大学教育学部教授
松永　寛明　本学非常勤講師
松浦　善満　龍谷大学文学部教授
桶谷　　守　京都教育大学教職キャリア高度化センター教授
森田　洋司　大阪市立大学名誉教授
山内　乾史　神戸大学大学教育推進機構教授
小針　　誠　同志社女子大学現代社会学部准教授

研究進捗状況

今年度は平成27年度から継続的に行ってきた質問紙調査の分析・報告をおこなった。調査は滋賀県内の高等学校にも協力を要請し、本調査の回答数は98学校・66,399名となった。京都府・滋賀県ともに地域の偏りもなく、公私立の高等学校全般にアンケートを実施することができた。

アンケート結果からは、高校生の9割近くがスマートフォンを所有しており、これまでネットいじめを経験したことのある高校生は8.7%（高校時に限定すると5.4%）であることが明らかとなった。これらの調査結果については、原清治他「ネットいじめの実態に関する実証的研究（Ⅰ）」（日本教育学会第75回大会、於：北海道大学、2016年8月25日）、原清治他「ネットいじめの構造とその対策に関する実証的研究（Ⅰ）」（日本教育社会学会第68回大会、於：名古屋大学、2016年9月17日）にて詳細な内容を報告している。

また、前年度より小中学校を中心としたいじめに関する啓発活動も継続して行っており、児童生徒のみならず、保護者も対象とした社会貢献活動を行っている。

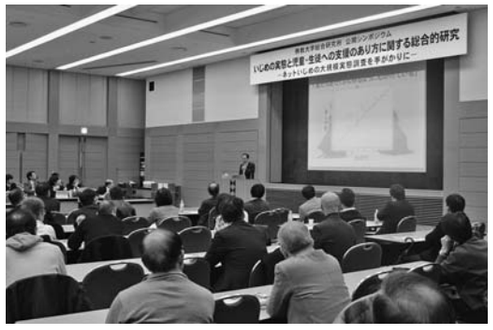
研究会等の開催状況

本年度は12月23日（金）13：00～16：15に「いじめの実態と児童・生徒への支援のあり方に関する総合的研究ーネットいじめの大規模実態調査を手がかりにー」を公開シンポジウムの形で開催した。

第1部の基調講演では土井隆義氏（筑波大学）より、「「いじり」と「いじめ」のあいだ～現代思春期の友人関係をめぐる光と影～」をテーマに、現代の子どもたちの人間関係がどうなっているのか、その特徴についてご講演いただいた。

第2部のパネルディスカッションでは、前述した大規模アンケート調査の分析データについて日本教育学会、日本教育社会学会での発表から大多和直樹氏（帝京大学）、小林至道氏（関西大学）、小針誠氏（同志社女子大学）、山内乾史氏（神戸大学）、西谷雅史氏（株）エースチャイルド）の5人のパネリストから報告された。

それらの報告をもとに、指定討論者である松浦善満氏（龍谷大学）から、報告者ごとへの質問を投げかけ、大規模調査から見えてくる子どもたちの「生きづらさ」について活発な議論を行った。



公開シンポジウム

■プロジェクト研究

「共生（ともいき）の理念に基づいた保健医療福祉専門職のための IPE プログラムの開発と評価」（2 年目）

研究代表　日隈　ふみ子

研究組織

〈研究員〉

日隈ふみ子　保健医療技術学部教授
伊藤　真宏　仏教学部准教授
漆葉　成彦　保健医療技術学部教授
折坂　義雄　保健医療技術学部教授
苅山　和生　保健医療技術学部准教授
後藤小夜子　保健医療技術学部助教
篠原由利子　社会福祉学部教授
白井はる奈　保健医療技術学部准教授
白星　伸一　保健医療技術学部准教授
菅野　圭子　保健医療技術学部准教授
田尻　后子　保健医療技術学部准教授
得丸　敬三　保健医療技術学部准教授
濱吉　美穂　保健医療技術学部講師
林　　悠子　社会福祉学部准教授
松岡　千代　保健医療技術学部教授
村岡　　潔　社会福祉学部教授
森安　朋子　保健医療技術学部講師
吉浜　文洋　保健医療技術学部教授
吉見　憲二　社会学部講師
利木佐起子　保健医療技術学部准教授

〈嘱託研究員〉

松岡　克尚　関西学院大学人間福祉学部教授

研究進捗状況

全体の活動

◦ATBH（All Together for Better Health）第 8 回国際学会（英国、オックスフォード大学、平成 28 年 9 月 6～9 日）への参加：世界各国の IPE（多職種連携教育）・IPW（多職種連携実践）の研究者が参加する学会であり、今年度のテーマは Value-based Practice であった。今後本学での IPE 実施における価値共有の重要性と手法についての知見を得ることができた。

◦聖クリストファーホスピス（英国）教育研修参加：近代ホスピスの源流である機関での教育研修に参加し、エンドオブライフケアにおいて IPW が必要不可欠であることを再確認し、本学でのエンドオブライフケアの IPE プログラムに向けての示唆を得ることができた。

IPW 班の活動

◦精神班：精神科病院の司法精神医療における IPW に関する調査研究として、10 月に岡山の 1 病院、2 月滋賀県の 1 病院の調査を実施した。次年度は奈良県、神奈川県での調査を実施する予定である。

IPE 班の活動

◦学生を対象とした IPE 調査研究：仏教学部、保健医療技術学部（理学療法学科、作業療法学科、看護学科）1 回生を対象として、IPE スキルに関し、RIPLS（Readiness for Interprofessional Learning Scale）を用いた質問紙調査を実施した。その結果については『佛教大学総合研究所紀要』第 24 号で報告した。

◦「佛教大学の特色を生かした IPE プロジェクト」：佛教大学の特色として仏教学部も交えた IPE プロジェクトとして、エンドオブライフケアをテーマとした新規プロジェクトを企画した。具体的には、エンドオブライフケアをテーマとしたシンポジウムの開催と、学生を対象とした IPE プログラムを次年度実施する予定である。

次年度のシンポジウムの準備として、先駆的に臨床宗教師と連携したエンドオブライフケアの取り組みを行っている台湾の慈済大学と付属病院の事前調査を行った（平成 29 年 3 月）。

◦理学療法学科・作業療法学科・看護学科 4 回生合同ゼミ発表会の開催（平成 28 年 12 月 19 日 12：50～14：20、N 1-202 教室）：各学科 3 名の学生による卒業研究の発表と討議を行うことをとおして、各学科の専門性や特徴を相互に学び合う機会となった。次年度は参加学科数や学生数を増やし継続していく予定である。

・研究会等の開催状況

◦第 1 回会議：平成 28 年 6 月 21 日
・新メンバー紹介
・学生対象 IPE 調査研究報告
・今年度の取り組みについて

◦第 2 回会議：平成 28 年 7 月 28 日
・日本保健医療福祉連携教育学会参加について
・IPW 精神班：調査進捗状況報告
・「佛教大学の特色を生かした IPE プロジェクト」の検討

◦第 3 回会議：平成 28 年 11 月 22 日
・ATBH 参加報告
・学生対象 IPE 調査報告
・IPW 精神班：調査進捗状況報告
・「佛教大学の特色を生かした IPE プロジェクト」について：エンドオブライフケアをテーマとしたシンポジウムと学生対象 IPE プログラムの検討
・IPW 実態調査についての検討

◦第 4 回会議：平成 29 年 1 月 31 日
・IPE 班：合同ゼミ発表報告
・IPW 精神班：調査進捗状況報告
・千葉大学看護学研究科主催、DNGL 災害時専門職連携演習への参加について
・次年度計画について：エンドオブライフケアシンポジウム、教員向け IPE スキルトレーニングプログラム、学生対象エンドオブライフケア IPE プログラム、学生対象 IPE 研究、京都市内 IPW 実態調査、予算案等の検討

平成27年度　共同研究公開報告会要旨

「近代京都における都市空間情報のデータベース化とその利用に関する研究」プロジェクト

「大縮尺図から見た近代京都への接近－大正・昭和初期の京都と地図－」

日　時：平成28年2月27日（日）15：00～18：00
会　場：第3会議室（1号館1階）
参加者：55名

〈プログラム〉

講演・発表：

①「3000分の1都市計画図に見る1920～30年代の京都」
　山田　誠（龍谷大学文学部教授）

②「『京都市明細図』ベースマップの作成・修正の時期とその背景」
　渡邊　秀一（佛教大学歴史学部教授）

③「昭和6年における京都市中心部の宅地利用状況」
　木村　大輔（佛教大学非常勤講師）

〈概要〉

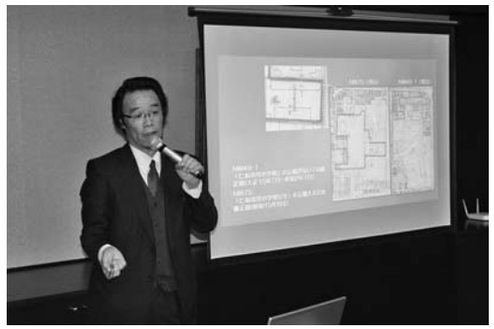
近代京都プロジェクトは、明治期～昭和前期にかけて作成された大縮尺地図に記載された地理的情報と近代京都における社会経済的情報とを結合させたデータベースの構築を目指してきた。データベース構築に向けては、プロジェクト期間3年間のうちに多様な大縮尺地図の資料的分析と地理的情報の抽出、社会経済的情報の空間的・時系列な整理という作業を並行して進めてきた。したがって、近代京都プロジェクト3年間の研究成果は、近代京都の大縮尺地図に関する新たな知見と社会経済的情報の空間的・時系列蓄積の二点にある。

2015年度最後に開催した公開報告会はプロジェクト期間中に収集した様々な大縮尺地図の資料的分析と、近代京都の社会経済的情報の空間的・時系列な蓄積と整理の成果、大縮尺図から抽出される地理的情報とを対照させて、大縮尺地図の資料的価値を探ることを目指し、「大縮尺図から見た近代京都への接近」をテーマに、講演と二つの研究発表からなるプログラムで開催した。

山田誠氏の講演は近代日本の主要都市で作成された都市計画図に焦点を当てたものである。氏はこれまで京都を含む近代日本の主要都市で作成された都市計画図を長年にわたり精力的に調査・研究してきた研究者である。その成果をもとに、また本報告会の趣旨に沿って、大正期に作成された3000分の1都市計画図の作成のプロセスを主要都市の事例を交えながら概観し、そのうえで京都市の都市計画図を取り上げ、大縮尺図であるからこそ読み取れる地域の情報を事例的に報告し、近代都市研究における大縮尺図の資料的な価値を論じた。

山田誠 氏

渡邊は京都府立総合資料館に所蔵されている「京都市明細図」を取り上げた。京都市明細図は火災保険地図という性格がクローズアップされ、またその情報が多方面で利用されているが、渡邊が焦点を当てたのはそのベースとなった大縮尺の市街図であった。京都市明細図に使用された市街図は無修正の図も少なくないが、部分的に、また全面的に修正されたものが多い。そうした修正図の一枚一枚の修正年を確認し、修正年次の偏りや同一修正年の面的な連続性から、土地区画整理事業の進行に合わせて修正されたものであることを指摘した。



渡邊秀一 研究代表

また、木村は法務局に保存されている京都市中心部の旧土地台帳と旧土地台帳付属地図を収集し、付属地図に基づいて基本的な土地区画図を作成し、そこに旧土地台帳の情報を加えて土地区画の変遷をたどっている。さらに、その成果に基づいて、京都市中心部における実際の土地利用状況と旧土地台帳付属地図の土地区画との対応関係を検証した。

木村大輔 嘱託研究員

公開報告会には講演・研究発表だけでなくその後の質疑応答にも、近代京都の大縮尺地図を研究対象とする研究者や大正期に始まる都市計画や大正末期から昭和期にかけて進行した土地区画整理事業の研究者に加え、近代京都の歴史に関心をもつ人など、50名を超える方々にご参加をいただいた。また、公開報告会の準備にご協力いただいた佛教大学総合研究所事務局の皆様にも、お礼を申し上げたい。

平成27年度　共同研究公開シンポジウム要旨

「現代社会における宗教の力」プロジェクト

「震災後と宗教～東日本大震災後の支援や追悼に果たす宗教の役割～」

日　時：平成28年3月13日（日）13：00～17：00
会　場：常照ホール（成徳常照館5階）
参加者：52名

〈プログラム〉

報告：

①「滋賀教区浄土宗青年会の近江米一升運動による被災地支援の取り組み」
　曽田　俊弘（浄土宗総合研究所嘱託研究員）

②「京都での避難者支援活動」
　金田　伊代（「神主さんと京の社を巡ろうの会」代表）

③「旧被災地における記憶の継承と宗教の役割」
　三木　　英（大阪国際大学教授）

④「コメント」
　西出　勇志（共同通信長崎支局長）

⑤リプライ・総合討論
　曽田　俊弘、金田　伊代、三木　英、西出　勇志、大谷　栄一

〈概要〉

甚大なる被害をもたらした東日本大震災の発生から、5年目（注：2016年時点）を迎えた。以前にくらべ、震災に関するマス・メディアの報道数が減り、この出来事の記憶の風化が懸念されている。

そこで、共同研究「現代社会における宗教の力」プロジェクトでは「関西」という観点から、あらためて「震災後と宗教」の問題を検討することを意図し、本シンポジウムを開催した。

シンポでは、滋賀教区浄土宗青年会の近江米一升運動による被災地支援活動（曽田俊弘氏）と、「神主さんと京の社を巡ろうの会」による京都での避難者支援活動（金田伊代氏）についてご報告いただくとともに、4つの震災（関東大震災、濃尾大地震、北丹後地震、阪神・淡路大震災）の「旧」被災地に

曽田俊弘 氏

金田伊代 氏

三木英 氏

見られる記憶継承のための宗教的装置のあり方（三木英氏）についてもご報告いただいた。

また、共同通信長崎支局の西出勇志氏からは、三人の報告に対して豊富な宗教取材の知見にもとづくコメントを頂戴した。

西出勇志 氏

フロアからも数多くの質問が寄せられ、「東日本大震災後の支援や追悼に果たす宗教の役割」とその課題について議論された。参加者数は約40名と、多くなかったものの、大変充実したシンポジウムとなった。

公開シンポジウム

なお、シンポジウム終了後、岩手大学図書館から、岩手県の自然災害および東日本大震災（2011. 3. 11）に関する資料を掲載している website「岩手県の自然災害と東日本大震災に関する資料リポジトリ」（http：//rndd.iwate-u.ac.jp/）に本シンポジウムの資料（チラシ、報告レジュメ）を掲載したいとの依頼があった。現在、本サイトにシンポジウムの資料が掲載されていることを付記しておく。

平成28年度　共同研究公開シンポジウム要旨
「いじめの実態と児童・生徒への支援のあり方に関する総合的研究」プロジェクト

「いじめの実態と児童・生徒への支援のあり方に関する総合的研究 ーネットいじめの大規模実態調査を手がかりにー」

日　時：平成28年12月23日（金・祝）
　　13：00〜16：15
会　場：常照ホール（成徳常照館5階）
参加者：235名

〈プログラム〉
講演：
第1部　基調講演
「「いじり」と「いじめ」のあいだ　〜現代思春期の友人関係をめぐる光と影〜」
　土井　隆義（筑波大学人文社会系教授）
第2部・パネルディスカッション
　パネリスト
　　大多和直樹（帝京大学教育学部教授）
　　小林　至道（関西大学教育推進部特命助教）
　　小針　　誠（同志社女子大学現代社会学部准教授）
　　山内　乾史（神戸大学大学教育推進機構教授）
　　西谷　雅史（エースチャイルド株式会社代表取締役）
　データ報告者
　　浅田　　瞳（華頂短期大学講師）
　　堀出　雅人（華頂短期大学講師）
　指定討論
　　松浦　善満（龍谷大学文学部教授）
　コーディネーター
　　原　　清治（佛教大学教育学部教授）

〈概要〉
佛教大学総合研究所が主催する「いじめの実態と児童・生徒への支援のあり方に関する総合的研究」プロジェクトでは2014年からいじめ・ネットいじめの実態やその対策に関する研究を進めており、毎年シンポジウムの形で研究結果を報告している。今回は文部科学省科学研究費（B）「ネットいじめの構造とその対策に関する実証的研究）（研究代表者原清治　佛教大学教育学部教授）調査の分析結果から明らかとなった、ネットいじめとリアルいじめとの関係について考えるシンポジウムを開催した。人間関係のほころびがネットツールによって、さまざまなトラブルの火種となっている実態を中心に報告した。

第1部の基調講演では筑波大学人文社会系の土井隆義先生より、「「いじり」と「いじめ」のあいだ〜現代思春期の友人関係をめぐる光と影〜」をテーマに、現代の子どもたちの人間関係がどうなっているのか、その特徴についてご講演いただいた。内容としては、いじめの主流はコミュニケーション操作系のいじめが多くなっていること、ネット以外に居場所がある子どもほどスマホの時間が長いこと、子どもたちにとってリアルとネットは地続きになっていることなどをご指摘いただいた。とりわけ、子ども・若者の人間関係の変化がいじめの様相を大きく様変わりさせていること、「キャラ化」は周囲から浮かないといういじめのリスクヘッジとして用いられるが、個性が平坦であるために、必ずしもリスク（いじめ）を回避できないジレンマに陥っていることなどをご報告いただいた。

土井隆義 氏

パネルディスカッション

その後、第2部のパネルディスカッションでは、京都・滋賀の高校生66,399人を対象とした、「リアル」いじめ、「ネット」いじめに関する大規模アンケート調査の分析データについて日本教育学会、日本教育社会学会での発表から5人のパネリストから報告された。大多和直樹氏（帝京大学）からは同じ学力階層でもいじめ・ネットいじめが発生しやすい「磁場」理論について報告された。小林至道氏（関西大学）からはいじめの磁場と家庭でのルールとの関係について報告された。小針誠氏（同志社女子大学）からは、学校文化といじめの関係について報告された。山内乾史氏（神戸大学）からは、学校移動で生じる相対的な学力移動といじめの関係について報告された。西谷雅史氏（（株）エースチャイルド）からは子どものケータイのやりとりを見守るアプリ開発の観点から報告された。

それらの報告をもとに、指定討論者である松浦善満氏（龍谷大学）から、報告者ごとへの質問を投げかけ、大規模調査から見えてくる子どもたちの「生きづらさ」について活発な議論を行った。

共同研究ポスター展示の開催

総合研究所共同研究の研究は、公開研究会やシンポジウム・講演会を通して広く学内外へ公開している。また、その成果はホームページや総合研究所紀要に掲載し、周知・発信を行っている。

平成28年度は、平成27年度に引続き研究成果を広く発信するために、職員、学生および本学卒業生や一般の方を対象に、四条センターでポスター展示を行った。

第1回展示

日　時：平成28年5月24日（火）～6月3日（金）
　　および6月20日（月）～6月30日（木）
会　場：四条センター　カルチャールーム
内　容：平成27年度に実施の共同研究6プロジェクトの研究内容・成果をポスター1枚ずつ掲示

第1回

第2回展示

日　時：平成28年9月1日（木）～9月30日（金）
会　場：四条センター　カルチャールーム
内　容：平成28年度に実施の共同研究3プロジェクトの研究内容・成果をポスター1枚ずつ掲示

第2回

佛教大学総合研究所紀要　第24号

（2017年3月25日刊）

目　次

〈論文〉
比婆荒神神楽の祭儀構造 …… 井上隆弘
高村光太郎の「道程」時代の詩歌
　－「痛ましき地獄の画家」との関連から－ …… 田所弘基
現代医学と仏教医学 …… 村岡　潔
現代の死における医療と宗教の共同管理のあり方を考える
　－仏教的ケアは、いかにして行われるのか－ …… 福永憲子
ネットいじめの啓発効果に関する実証的研究 …… 浅田　瞳
　　原　清治
佛教大学における IPE の準備状況
　－保健医療技術学部、社会福祉学部の1回生を対象とした横断調査から－ …… 吉見憲二
A Syudy of the Ascetic Precepts in the *Da amituo jing* …… 肖　越

佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集　第3号
近代京都における都市空間情報のデータベース化とその利用に関する研究

（2017年3月25日刊）

目　次

「近代京都プロジェクト」研究成果報告書の刊行にあたって …… 渡　邊　秀　一

〈論文〉
大正期京都における企業分布 …… 渡　邊　秀　一

明治初期の境内地処分と旧境内地の開発
　－新京極を事例に－ …… 小　林　善　仁

京都烏丸通沿道における街並の形成過程
　－大正～昭和初期を事例に－ …… 木　村　大　輔

明治期における京都市街の変化
　－三条通地区の場合－ …… 鈴　木　亜香音

佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集　第4号
人口減少社会における持続可能な地域モデルの構築に関する研究

（2017年3月25日刊）

目　次

はじめに …… 的　場　信　樹

序　章　自律分散システムとしての持続可能な地域モデル …… 的　場　信　樹

第2章　自治体とローカル・ガバナンス …… 大　藪　俊　志

第3章　都市問題とコンパクトシティ …… 清　水　陽　子

第4章　村－富と文化－ …… 湯　川　宗　紀

第5章　地域シンボルとソーシャルキャピタル
　－和服に関する意識調査を通した地域のつながり－ …… 林　　隆　紀

第6章　居住地域の空き地とソーシャル・キャピタル …… 水　上　象　吾

第7章　地域愛、新住民受け入れ受容度などの強弱は、回答者の属性とどのように関連しているか
　－京都市右京区京北宇津地域でのアンケート結果の紹介－ …… 田　村　有　香

第8章　高校生の地域定着および地域離脱の要因
　－聞き取り調査より－ …… 長　光　太　志

第9章　自治体の行政改革 …… 大　藪　俊　志

第10章　住宅とローカルガバナンス
　－京都市中心部におけるマンション居住の持続可能性－ …… 三　重　遷　一

第11章　ローカル・ガバナンスと防災 …… 山　本　奈　生

佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集　第 5 号
『脱貧困』戦略の構築－共生社会のグランドデザイン－

（2017 年 3 月 25 日刊）

目　　次

はじめに …… 鈴木　勉

現代の貧困の特徴とナショナルミニマム …… 金澤誠一

京都市における「ホームレス」対策の始動と展開
－1990 年代～2000 年代を中心に－ …… 加美嘉史

一時生活支援事業の課題
－生活困窮者自立支援法と生活保護の間で－ …… 中野加奈子

東アジア家族主義と新しい社会的リスク …… 朴　光駿

貧困と疾病をめぐる一考察 …… 村岡　潔

韓国における女性高齢者の貧困：
社会的排除の視点からのアプローチ …… 呉　英蘭

中国東北地域における高齢者の現状と在宅介護サービスの課題
－延辺朝鮮族自治州を中心に－ …… 李　仁子

脱貧困＝共生社会のグランドデザイン
－障害のある人々の平等回復に関する考察を通して－ …… 鈴木　勉

成人期障害者の母親におけるケアと就労の両立困難 …… 田中智子

主体の育ちを目指すひきこもり支援をめぐって
－支援の場に流れる「力」に抗う実践－ …… 山本耕平

Child Poverty Addressed in Medical Articles Written in Japanese :
Available on Medical Databases …… 武内　一

子どもへの貧困の影響
－多施設共同での質問紙による 3 調査－ …… 武内　一
佐藤洋一
山口英里
和田　浩

子どもの貧困 …… 武内　一

日台の社会構造、家族構造の変動とひとり親世帯の支援施策に関する比較研究 …… 大友優子
山西裕美
大友康博

日台の外国人母子世帯の現状と課題に関する一考察 …… 大友優子

彙　報

■平成 28 年度　総合研究所組織

所　　長　野﨑　敏郎

研究推進機構会議委員　藤井　透*　大西磨希子　加藤　邦彦　李　昇燁　中道　泰子
山本　奈生　黒岩　晴子　松岡　千代　長谷川順子　森　智女
鳥羽　典子　岸田稔穂子**　國枝　利行**

運営会議委員　野﨑　敏郎*　田山　令史　有田　和臣　青山　忠正　大西　正倫
越智　淳子　大西　伸江　鳥羽　典子**

紀要編集委員　野﨑　敏郎*　田山　令史　有田　和臣　青山　忠正　大西　正倫
越智　淳子　大西　伸江　鳥羽　典子**

総合研究所員　大西　伸江　山本　博子

（*は委員長）（**はオブザーバー）

■平成 28 年度　共同研究

プロジェクト研究

No.	研究名	代表名	研究期間
1	現代社会における宗教の力	榎本　福寿	2014～2016 年度
2	いじめの実態と児童・生徒への支援のあり方に関する総合的研究	高見　仁志	2014～2016 年度
3	共生（ともいき）の理念に基づいた保健医療福祉専門職のための IPE プログラムの開発と評価	日隈ふみ子	2015～2017 年度

■平成 28 年度　総合研究所特別研究員

総合研究所では、本学大学院博士後期課程修了者または単位修得満期退学者で、本学において学術研究を希望する研究者に対して、総合研究所特別研究員規程に基づいて特別研究員を募集し、10 名を採用した（採用期間は平成 28 年 4 月～平成 29 年 3 月）。

氏名	研究課題
尾脇　秀和	近世身分格式の研究
川島　尚子	張廷済の書学－学問、交友、生活の書－
熊谷　貴史	仏教荘厳における神変の造形表現－光背意匠を中心に－
清水　俊史	パーリ上座部における仏説論／聖典観の研究
肖　　越	語彙・語法による無量寿経古漢訳の文献学的研究
田所　弘基	日本近代文学と美術の相関に関する研究
田中　夕子	往生人の往生観と作善－往生人源俊房を中心に－
筒井　大祐	中世八幡縁起の総合的研究
手塚　利彰	近世チベット文書「カンカル家文書」の保存・公開と研究
村田　真一	中世宇佐八幡信仰と「修験」－『八幡宇佐宮御託宣集』を中心に－

■活動記録（平成28年２月～平成29年３月）

２月27日　近代京都プロジェクト「大縮尺図から見た近代京都への接近－大正・昭和初期の京都と地図－」
３月７日　第７回総合研究所運営会議
13日　現代宗教プロジェクトシンポジウム「震災後と宗教～東日本大震災後の支援や追悼に果たす宗教の役割」
４月７日　総合研究所特別研究員ガイダンス
12日　第１回総合研究所運営会議
13日　第１回研究推進機構会議
27日　第２回研究推進機構会議
５月10日　第２回総合研究所運営会議
18日　第３回研究推進機構会議
21日　現代宗教プロジェクト研究会
24日－６月３日　共同研究ポスター展示
６月１日　第４回研究推進機構会議
20日－30日　共同研究ポスター展示
22日　第５回研究推進機構会議
７月９日　いじめ研究モデルプロジェクト研究会
12日　第３回総合研究所運営会議
13日　第６回研究推進機構会議
９月１日－30日　共同研究ポスター展示
６日　第８回研究推進機構会議
21日　第９回研究推進機構会議
10月４日　第４回総合研究所運営会議
15日　現代宗教プロジェクト研究会
19日　第11回研究推進機構会議
11月２日　第12回研究推進機構会議
15日　第５回総合研究所運営会議
16日　第13回研究推進機構会議
12月７日　第14回研究推進機構会議
21日　第15回研究推進機構会議
23日　いじめ研究プロジェクトシンポジウム「いじめの実態と児童・生徒への支援のあり方に関する総合的研究」
１月17日　第６回総合研究所運営会議
18日　第16回研究推進機構会議
29日　現代宗教プロジェクトシンポジウム「死者儀礼の現代的地平へ」
２月８日　第17回研究推進機構会議
20日　第18回研究推進機構会議
３月２日　第７回総合研究所運営会議
８日　第19回研究推進機構会議
22日　第20回研究推進機構会議

■編集後記

『佛教大学総合研究所報』第38号をお届けします。本研究所所管の各共同研究は、それぞれ創意ある取り組みを続けており、シンポジウムも盛況でした。今年度刊行した「近代京都における都市空間情報のデータベース化とその利用に関する研究」、「人口減少社会における持続可能な地域モデルの構築に関する研究」、「『脱貧困』戦略の構築――共生社会のグランドデザイン――」の三つの研究成果報告論文集も、関係諸先生方の御尽力のおかげで、大変充実したものになりました。また特別研究員諸学兄も、精力的に研鑽を積んでいます。本研究所は、今後も、本学の研究活動への支援に関して、必要な点検をなし、適切な改善策を講じていく所存です。

(N)

BUKKYO UNIVERSITY

佛教大学総合研究所報　第38号

発　行　平成29年3月25日
発行所　佛教大学総合研究所
〒603-8301　京都市北区紫野北花ノ坊町96
TEL:075-491-2141(代表)
FAX:075-495-2151(直通)
URL　http://www.bukkyo-u.ac.jp/facilities/labo/